

# きれいな水って、 どんな水。

「きれいな水」をテーマに「飲み水」や「親水」について考えてきた2000年のびわろ通信。この秋号では、生き物の視点で水の大切さを見つめ、生命を大きくむ水について検証します。水辺の動植物が生きるために必要な水の要素や植物がもたらす水質浄化の実験など、生命と水の間を、あらゆる角度から紹介します。

## 生命を大きくむ水。

私たちが思い浮かべるきれいな水のイメージとは、多くの場合、美しく澄み切った水です。そしてそれは無色透明・無味無臭という飲み水の条件にも、そのまま当てはめることができます。ところが、魚や水辺の生物が生きていく上で必要な水は、飲み水の条件とは大きく異なります。なぜならば、魚や水生生物は、水を飲むのではなく、水の中の酸素を呼吸し、水の中の栄養分を吸収して生きているからです。したがって、水辺の生き物にとって大切なのは、飲み水のように澄んでいて、不純物を含まないような水ではなく、窒素やリンカリウムなどの栄養分やエサとなるプランクトンなどを含んだ豊かな水なのです。

## さまざまなきき物にとって大切な水。

先に述べたように、生命を大きくむ水には、食物連鎖を形成するさまざまな生物が棲んでいます。また、それらの生き物は、それぞれの特徴に合わせてきれいな水からよれた水まで、幅広い水質に分かれて棲息しています。そこで、川に棲む生物の種類を観察することによって、その川の水質を知る手がかりを得ることができます。このように水質の目安となる生き物を指標生物と呼び、建設省や滋賀県では毎年水生生物について調査し、川の水質を調べています。指標生物として川底の石などについている小さな生き物や、住んでいる魚の種類などでも川の水質がわかります。さらに、自分で身近な川

# 生命の水を 考ええる。

人間の体に必要不可欠な水は、魚や水生生物をはじめ、水辺のさまざまな動植物にとってもかけがえないものです。しかし、私たち人間が、毎日の暮らしの中で、飲み水として使っている水道水やミネラルウォーターが、魚や水生生物にとっても理想の水かというと、必ずしもそうではありません。それでは、水辺で生きている生き物にとって、生命を大きくむ水とは一体どのようなものなのでしょうか。

の水質をチェックしてみると、どんな水でも、それを必要とする生物がいることを知ることができます。

